

## 6. 人間観

### 6-1. 人間の分類

#### 6-1-1. 性と年齢による分類

私は、小さいころ母にポンポンペ ponponpe と言われた。大きくなっても「タツは、いつまでもポンポンペだな」と言われた。

[鎌田タツ氏]

#### 6-1-2. 技能と性格による分類

ピリカメノコ pirka menoko きれいな女

[鎌田タツ氏]

昔の塘路の長老はタメサクじいさん、島太郎であった。塘路のクマ送りの時は小さかったから詳しいことは記憶にない。

[島 直氏]

前田専太郎さんは村長さんの家柄というわけでもないし、神様に詳しいというわけでもなかったが、年寄りであったから、人々の相談に乗ってやっていた。アイヌの人ではあったが、もともと何処の人かはわからない。鮭場で働いたこともあったらしい。若い時は体格もよく、相当やんちゃであったようだ。

[島 直氏]

やせた人を「チロンノップのようだ」と言った。チロンノップというのは、キツネのことだ。

[鎌田タツ氏]

#### 6-1-3. 身分・家系による分類

ニシパ nispa 「金持ち」

[島 直氏]

よその土地に行ってイナウ inaw (御幣)を削る時でも、イナウには自家のイトツパ itoppa (家紋)を彫る。

[島 直氏]

#### 6-1-4. 親族名称

アンユビ an-yupi 「兄」(?)

[島マチエ氏]

アナキ an-aki 「弟」(?)

[島マチエ氏]

エカシekasi 「じいさん」

チャチャ cáca 「祖父」

[島マチエ氏]

チャチャ caca おじいさんかおとうさんのこと

[伊藤隆雄氏]

ツレシ turesi (姉? 奥さん?)

[鎌田タツ氏]

ハポ hápo 「母」

[島マチエ氏]

ハポ hapo 「おかあさん」

[伊藤隆雄氏]

ポンポンベ ponponpe 「小さい子供」

[鎌田タツ氏]

[鎌田タツ氏]

## 6-2. 身体部位名称

チャロ caro 「口」

[鎌田タツ氏]

コッカパケ kokkapake 「膝」

[島マチエ氏]

パケ páke 「頭」

[島マチエ氏]

ケビトゥル kepitur 「額」

[島マチエ氏]

ラル ráru 「眉毛」

[島マチエ氏]

シキ síki 「目」

[島マチエ氏]

シキ ボロ siki poro 「目がでかい」

[島マチエ氏]

エトウ eru 「鼻」

[島マチエ氏]

エトウ タンネ etu tanne 「鼻が高い」

[島マチエ氏]

チャロ ボロ caro poro 「口が大きい」

[島マチエ氏]

ノッキリ nokkiri 「顎」

[島マチエ氏]

### 6-3. 人名

母は、オタイベオというアイヌ名を持っていた。

[伊藤隆雄氏]

私は大正4年8月3日生まれ。父は山形の出身の和人で鳥海ケイスケと言い、母はメノコ menoko (アイヌの女性)だ。そして、私は8才か9才で鳥海家から島家へ養子に行った。父の兄が建てたという鳥海神社と言うのが山形に今でもあるそうだ。母の名は杉谷トク (アイヌ名コエラ koera) と言う。

[島 直氏]

義理の父親の島太郎のアイヌ名はオクカイエカシ okkay ekasi と言った。明治5年か6年にアイヌに戸籍ができたので、その時から日本人の名をつけたそうだが、それ以後でもアイヌの名をつけていたらしい。

[島 直氏]

塘路にアイヌ名をチビルという人もいた。この人の日本名は進藤ツナと言った。塘路にはアイヌ名をオタイベ otaype という名の人もいた。この人は現在虹別に住んでいる伊藤隆雄さんの母親だ。

[島 直氏]

塘路市街に昔あった、お祭りの時に儀式をやるオンネチセ onne cise (大きな家)の家主をしていたのは鈴木コナベ (日本名アン) という人だった。体の小さい人だったが、人間が大きいというのでか、オンネバッコ (大きなおばさん) と呼ばれていた。

[島 直氏]

### 6-4. 身体の世界

#### 6-4-1. 入墨・文身

入墨はガンビの皮を燃して鍋底についた墨を使うと島太郎に教わった。

[島 直氏]

入墨のやり方は、鍋に水をいれて火にかけ、下でガンビの皮を燃やす。するとたくさん油煙が出るので、それを集めて入墨する。入墨には二つやり方があるそうだ。一つは針で傷を細かくいっぱい付けて、そこに墨を塗る、他のやり方はカミソリで傷を付けて墨を塗るそうだ。十勝の女は上の方まではね上がるように入墨をする。これに対し、塘路でははね上げない。私の生みの母も育ての母も入墨をしていた。塘路ではあと鈴木アン (コナベとも) という、市街のオンネチセ onne cise (大きな家、集会所)の家主のおばあさんも入墨をしていた。体の小さいかなり年を取った人であったのに、オンネバッコ onne bakko (大きなおばあさん)と

呼ばれていた。

[島 直氏]

塘路では腕にも入墨をしている人がいた。腕の入墨は、網目状ではなく、腕輪状に入れていた。

[島 直氏]

西シュンベツでは入墨をしている人を2、3人見たが、名前はわからない。

[島マチエ氏]

塘路の女性の入墨は十勝と比べるとあまり上の方まで入れなかったようだ。手にも入墨を横に入れていた。

[島 直氏]

#### 6-4-2. 髪型と髪の手入れ

私が小学校に通うときは、髪をいちよう返しに結われた。

[鎌田タツ氏]

髪の毛に櫛を入れず、バサバサにしているとパルツチャヤと言われて叱られた。

[鎌田タツ氏]

#### 6-4-3. 病気と治療

ニワトコをサコンニ sakonni といった。風邪を引くとサコンニの樹皮を取りにいき、シコロの実(シケレベ)とともに土瓶に入れて飲んだ。

[鎌田タツ氏]

風邪を引いたとき、シコロの実を煎じた汁を飲ませられたことがある。

[伊藤隆雄氏]

病気にかかって、占い師のような人に見てもらうことはなかった。

[鎌田タツ氏]

オオバコの葉をあぶって、できものにつける。

[島マチエ氏]

ゲンノショウコは下痢の薬。普段に食べたのはサンチン(クロミサンザシ)の実。

[島マチエ氏]

シコロの皮は胃の薬になる。煎じて飲む。

[島マチエ氏]

風邪、腹痛の薬はシケレベ(キハダ)の実を使った。

[島マチエ氏]

シコロ(キハダ)の皮を木村さんのおばさんという人がいつもくわえていた。唇が荒れるのを防ぐのだそうだ。また、おろしがねでおろして麦粉を加えてねって湿布薬に使うと教えてくれた。

[島マチエ氏]

ジャガイモをすってヤケドにつける。

[島マチエ氏]

神経痛にはコクワヅル、マタタビヅルを風呂に入れて入った。

[島マチエ氏]

塘路にはイム imu (一種の催眠状態)になる人は二人いた。私の生みの母も少しやった。母は50代で亡くなったから、そんなに年でもなかったが、もう一人のおばあさんは、もうかなりの年寄りであった。その人はよくなった。他の連中にからかわれているようなものなので、かわいそうな感じがした。何もしていないのに、やらせておもしろがっているわけだから。イム imu は占いとは関係ない。瞬間的に催眠に掛かって、言ったことと反対のことをやる。例えば、その人の膝をなでろと言えば、反対に膝を叩いたりする。

[島 直氏]

イム imu (催眠状態)になる人は昔たくさんいた。しかし、今はイムになる人も少なくなった。

[島マチエ氏]

イム imu (催眠状態)を起こすと、その人は人をたたいたりする。わざとからかってイム imu を起こすようにすることもあった。「おれならたたかないもな」とからかうと、かえってたたく。言ったことと反対のことをやる。なんでも逆のことをやる。

[島 直氏、島マチエ氏]

イム imu (催眠状態)になる人は気の優しい人に多いようだ。やり始めたらおもしろいから、みんながからかうとだんだん重くなるのではないか。イム imu と言ってから、やらせようと思うことの反対のことを言うと思ったとおりにやるようだった。催眠術に似ている。

[島 直氏]

養父の島太郎は、カムイノミ kamuynomi (お祈り)を頼まれることがよくあった。病人が出た時に、アベウチ apeuci (火の神)に頼んで病気を直してくれと頼まれて行ったようだった。

[島 直氏]

#### 6-4-5. お守り・まじない

なぜだかは忘れたが、母が綿に火をつけて、「フシ、フシ」といいながら、私の体を服の上から払ってくれたことがある。

[伊藤隆雄氏]

イケマ(ペネフ penep)は、朝顔のような花を咲かせるものだが、その根を糸に通して、窓と戸口のそばに掛けておいたり、袋に入れて首から下げたりした。悪魔払いだ。

[伊藤隆雄氏]

私は、今でもイケマを敷布団の下に入れたり、枕の下に入れたりしている。

[鎌田タツ氏]

ペヌプ penup (イケマ) を干して、かけらを幅2センチ長さ4センチ位の布袋に入れ、紐をつけて子供の首にたすきにかけさせて魔除けにする。袋はわきの下にくるようにする。子供だけではなく成人してもやる。今でも車に置いてお守りにしている人もいる。

[島マチエ氏]

イケマのかけらを4、5個、黒糸で数珠つなぎにして、直径10センチ位の輪にして、玄関や窓の角に釘を打ってかけておく。虹別の鎌田さんのおばさんに教わった。

[島マチエ氏]

島家では玄関用魔除としてイケマを幅4cmくらいに切ったもの5本を並べた中央に紐を通して玄関に吊している。(3-4参照)

[島マチエ氏]

#### 6-4-6. 禁忌

女の人が炉縁をまたいだら大変だ。ストーブに腰掛けたりするのも駄目だ。誰であってもストーブで足の裏を暖めたりしたら駄目だ。火の神様だから。

[島マチエ氏]

#### 6-4-7. 呪術

塘路には占いをするばあさんは一人しかいなかった。小学校を終る頃にはもういなかったの、子供の頃、一・二度、そういう話を聞いただけだ。だから、直接やっているのを見たことはない。虹別にイム imu (催眠状態) になる人は一人いたけれども。

[島 直氏]

虹別には占いをする人はいなかった。

[島 直氏、島マチエ氏]

トウス tusu (占い) は、塘路では村田のばあさんがやっていた。私の義理の兄貴の宇太郎という人がカラスにくそをかけられた。なぜ、かけられたかと村田のばあさんにたずねると、ばあさんはトウス tusu を始めた。始まると夢中になって唱えごとをするが、思ったことを全部言ってしまうとあくびしながら正気に戻ってしまう。始まるときもあくびをする。

[島 直氏]

私の兄が飛んでいるカラスにくそをかけられた。これは何か悪いことがあるのではないかと心配して、占いに見てもらった。占いに入るときは、あくびをして、だんだん精神的もうろう状態に入って、それから、どうしろ、こうしろとお告げをするそう。終ると又あくびをして、普通の状態に戻る。直接見た訳ではないからよくはわからないけれども。

[島 直氏]

#### 6-4-8. 夢占い

夢のことをアイヌ語でなんというかわからない。

[島マチエ氏]

夢の中で榛さんのヌサ nusa (祭壇) があって、西別川と思われる川の縁で、ドラムカン

みたいなもので火を焚いていた。そこに釜がかかっている、その中で何かの動物の大きな骨が煮られていて、それを串でひっくり返しているところを夢にみた。それで、やっぱり何かあるに違いない、私に何かしてくれっていう意味かもしれないと思って、現場に行って酒と塩で清めて来た。榛のおばさんは、こういう障りがあったから、こういう夢を見たのだというような解釈は、別にしてくれなかった。しかし、あんたに夢を見せているのだから、あんたが行ってやってくれないかと言った。

[島マチエ氏]

私は、男の人が死ぬ時、耳元で息する音が聞こえたり、朝起きることができなくなったりする。苦しくて、ようやく起きて座っていると、どこそこの人が亡くなったと知らせが来ることが多い。近しい人が亡くなった時、よくそういうことが起きる。それで、釧路に目の見えないばあさんで神様を降ろす人がいた。その人にお払いしてくれないかと頼んだ。するとそのばあさんは、あんたは人助けになる人だから、お払いしないでおけば良かったって、あとで思うかもしれないよと言われたけれど、とつてもじゃないが、少しばかりの苦しみではない、誰それが死んだというので、私がそれを背負っていなければならないのではたまらないと言ってお払いをしてもらった。それで大分よくなった。神様が私についていて、夢をみせてくれていたらしい。

[島マチエ氏]

ポンシュワン川の橋のところにきれいな紐があったので、またいで走って来たが、拾おうと思えばもうなかった。その話を家族にすると、母親がうなされた。白い着物を来た人が何十人も鈴か何かを持って列を作って来る夢をみたそうだ。それで心配した母親が釧路に行くと神おろし（和人）に聞くと、「あんたの宝（マチエ氏のこと）に力を借りたくて姿を見せたが、救ってもらえなくて、きれいな紐に見せたら拾ってもらえるだろうと思ったがそれでも拾ってもらえなかった、くやしい。」と言って、龍神さんが神おろしさんに降りたということだ。

[島マチエ氏]

## 6-5. 人の一生

### 伊藤剛氏の生活史

昭和1年、新潟県に生まれ、14歳のとき満州開拓団の一員として満州に移住する。戦後、ハバロフスクに抑留され、昭和22年11月に帰国する。昭和25年、開拓団の一員として、虹別に移住する。この戦後開拓には、17名の者が参加した。そのうち、家族持ちは、1名のみであった。虹別のアイヌ、伊藤鶴松・タカ夫妻の養子となり、養女伊藤フミ子氏と結婚した。戦後よそから来た者の目から見て、虹別のアイヌの農家は、和人の農家と変りなく見えた。

[伊藤 剛氏]

伊藤鶴松は、「孵化場のおじさん」と呼ばれていた。

[伊藤隆雄氏]

塘路で生まれ、17歳で虹別の孵化場に来た。36年間正規の職員として水産孵化場に勤務した。稚魚を見てもすぐに雄か雌か見分けた。孵化場では、官舎に住んでいた。周りは水産の役人がいっぱいいた。人夫としてアイヌが雇われていた。鎌田タツ氏の父も大工として孵化場で働いていたそうだ。伊藤鶴松は、朝、役所に出る前、帰宅後、鉄砲をもって鳥やウサギを射ちに行っていた。

[伊藤フミ子氏]

(米良孝毅氏のご教示によれば、明治23年、虹別にサケ・マス捕獲所ができた。また、第1次の和人入殖は、昭和4年とのこと。第2次は、戦後のこととなる)

#### 鎌田タツ氏の生活史

大正9年、虹別の水産孵化場で生まれた。旧姓は、乙部。母の名はタミといった。孵化場で大工をしていた父は鎌田タツ氏が3歳のときに亡くなり、母と盲目の兄の3人で暮した。榛孝太郎の家の隣の川の縁に家を建てさせてもらい住んでいた。母は忙しく仕事をしたが、榛のババ(孝太郎の妻)には、何でも教わった。米の研ぎかたまで教わった。学校に行くようになると、子守り、馬漕の雑用など働きに出された。夫は、秋田から来て、西春別(しゅんべつ)の軍馬補充部で働いていた人だった。

[鎌田タツ氏]

#### 島直氏の生活史

大正4年塘路で生まれた。祖父は山形の人で、山形県会議員、帝国議会議員まで勤めた人だ。父の弟(鳥海みちあき)は有名な書家であった。父(鳥海けいすけ)は、近衛師団の歩兵であったが、塘路に入殖し、アイヌの女性を妻とした。私が2、3才のとき、栄養失調でもう助からないというとき、ちょうど妹が生まれたので私と妹の二人に乳を飲ませて命を救ってくれた。大正11年皇太子が来道したとき、母に連れられて釧路に出たことがある。初めて電気を見て、これが恐ろしく母にしがみついた記憶がある。

開拓地からは小学校に通えないので、1、2年生のとき塘路の市街のある家に1ヵ月米1斗で預けられた。父は息子になんとかして学問をさせたかったのだ。10才から、塘路のアイヌ、島太郎の養子になった。

島太郎は、刑務所、軍馬補充部で働いた。クマ捕りはしたことがないようだった。

小学校を出ると、釧路でお茶屋の番頭を3年、造林1年を経て牛飼になった。

昭和23年、養父の島太郎が73歳で亡くなってから虹別に移った。

養父の島太郎は几張面な人で、地図に塘路の川の名を書き込んだ物があったが、火事で焼けてしまった。仕事で道内、内地を随分あちこち歩いた人であったらしい。

養父と一緒に生活したのは、実質小学校3年生以上になってからだ。それまでは小学校が遠いので、塘路の市街のオンネチセ *onne cise* (会館のようなもの)に寄宿して学校へ通った。6年生を終えてから、すぐ釧路へ働きに行ったので、養父の島太郎からアイヌの昔の事柄をならう機会はあまりなかった。



私の養父の島太郎は北大の犬飼哲夫先生に呼ばれて札幌に呼ばれて行ったりした。北大附属博物館のヌサ nusa（祭壇）も頼まれて島太郎が作った。

[島 直氏]

#### 島マチエ氏的生活史

父は南部の人で、孵化場で働いていた。母も孵化場に雇われていた。また、母は牛も飼い炭焼きもした。榛孝太郎の養子・養女のやっていた牧場に乳しぼりの手伝いに行くこともあった。

昭和17年、塘路と虹別の小学校の校長が取り持ってくれて夫と結婚して塘路に住んだ。昭和23年、虹別に移り、土井前太郎（私の祖父）の給与地に茅ぶきの家を建て、牛飼となった。昭和25年虹別から4 kmほど標茶よりの原野に移り開拓した。4 kmも離れた小学校に通う子供が毎日リヤカーで牛乳缶を運んでくれた。蕎麦しか生えない土地であった。鶏が草藪に13個も卵を産んだのを屋根に上った子供が見つke、町で引き取ってもらいそれで味噌、醤油、油を飼ったこともある。肉牛を飼ったり、豚を飼ったり本当に働き詰めに働いたが、昭和50年12月25日農家をやめ虹別市街地に移った。汗水を流しただけで終わった。

開墾地には、わき水もあり、いいところだった。いまでもお参りに行くことがある。

[島マチエ氏]

#### 6-5-2. 出産

安産のおまじないとして、妊婦にクマの腸の干した物を腹にしめさせるということを聞いたことがある。おまじないだから小さく切ったものを付けさせるのだと思う。クマは小さく産まれてどんどん大きく育つからだという。

[島 直氏]

妊婦は普通、さらしを腹に巻くが、母は、さらしを巻くとお産が重くなるから赤い布を巻くといいと言った。

[島マチエ氏]

母親が妊娠したことを知らなくても、上の子供が足をふったり、股の間から後をのぞくようなしぐさをしたりすると、その母親が妊娠したしるしだと言われる。そのことを「フシッコやってんだ」と言った。フシッコ husikko (husko か) は妊娠したという意味らしかった。母親でなくても、近しい人に子供ができたことを意味するらしい。自分の子供もやっていたが、そういうとき、不思議に親戚に子供ができていたりすることが多かった。

[島マチエ氏]

お産して11日目が見えない位の時、母も高血圧で倒れて人手がなかったので、仕方なく赤ん坊を背負って上の子供の入学式のために市街の学校へ行った。市街へ出るには途中でポンシュワン川の橋を渡らなければならなかった。帰ってからその話を前田さんのおじいさんにいうと、お産して日にちもたないうちに、たとえ橋の上とは言いながら川をまたぐことはよくないから、私が川の神様に謝っておいてあげるからねと言ってくれたことがあった。

[島マチエ氏]

お産してすぐに川をまたぐものではないという話を聞いたことがある。

[島 直氏]

私の母はお産が軽く、自分一人でお産して後始末をした。近所に呼ばれて産婆をすることもあった。

[島 直氏]

### 6-5-3. 育児と教育

アイヌの女性は、よその子供であっても、鼻を垂らしていたら口で吸取ってやったものだ。母が、子供を背負った人とすれ違ったさい、子供が鼻を垂らしていたら、すれ違いざまに吸ってやるのを見たことがある。このような情景は、戦後虹別に移ってからも見たことがある。

[島 直氏]

### 6-5-6. 葬礼と先祖供養

#### 葬式

アイヌ式の葬式は私たちの祖父母の代で終わりであった。遺体をキナで包み、串でキナを差し止めていたのを見た記憶がある。

[伊藤隆雄氏]

私の養父である島太郎の母の葬式はアイヌブリ aynu puri (アイヌの伝統的習慣)に従って行ったが、ござに死体をつつんでニワトコの串で止めてあった。

[島 直氏]

葬式の時、死体はござに包んだ。その包を留める串はニワトコの木で作る。昔は地面に埋めず、風葬にしたものらしい。

[島 直氏]

#### 死衣束

死んだ人に着せる着物があって、それを縫うとき、糸の末端に結び目を作らなかった。だから、糸を引くと簡単に抜けてしまうのである。また、模様のついていない真っ黒の布で手甲を作った。

[鎌田タツ氏]

#### 墓標

榛孝太郎さんの墓は、ナラの木の「とば」(墓標)で、真四角の木の柱であり、昔風のもではなかった。昔の墓標はドスナラの杭を立てるものであったが、そういうものを立てる人はほとんどいなかった。ドスナラは、腐りにくいそうだ。

[伊藤隆雄氏]

#### 先祖供養

お盆になると、御馳走をつくり、祖母に連れられてお墓参りに行った。

[鎌田タツ氏]

最近、榛のおばさん(ミヨ。榛孝太郎の養女)が夢に出たので、塩と酒を買って榛孝太郎の

家の裏のヌサがあったところに言ってお祈りしてきた。(榛孝太郎の奥さんは目も耳も遠い人であった。余り覚えていない。)

[島マチエ氏]

私は10年位前不思議な夢を見た。榛さんのヌサ nusa (祭壇)があったと思われる場所にテントのようなものがある、じいさんとばあさんが出てきた。ばあさんは子どもを背負っていた。私はじいさんと向きあって座った。じいさんは立て膝して座った。じいさんはトゥキ tuki (杯)を持っていた。そのトゥキ tuki の中には黒い実(クマ送りか何かに使ったのではないかと思われる実。もしかするとサンチンの実か)が入っていて、それで私は、カムイノミ kamuy nomi (祈り)だかというものをやるのかなあと思って見ていた。これは何か訳があって、お酒でもまいてほしいのかなと私は夢うつつに考えた。ばあさんのおぶっている子供は、誰の子供だろうかと思ったが、シヨールのようなものがかかっている、見ることができない。窒息でもしているのではないかと思ってあわててシヨールをとったが、子供もいない。そこで汗びっしょりになって目が醒めた。

先祖の誰かが何か欲しいものがある、こういう夢を見せるのだろうかと気がかりになった。それで、夫の生みの父親(鳥海ケイスケ)の命日が一日で、母親(杉谷トリ)の命日が六日なので、六日にいろいろ仏壇に供え物をあげて、足りない人がいたらそちらにまわしてくださいとお祈りした。

こういう気がかりな夢を見ると、私は酒と塩を持って、昔、大野さんが住んでいた所の近くの崖へ出かけて行く。昔、大野さんの家のすぐ角にクマのチセ cise (家)があって、そこでお祭りをした。そのそばに崖があった。それで、気がかりな夢を見ると、私はお酒と塩を持って行って、その崖にまいてお祈りすることにしている。今は時代が変わって、若い人は何もわからないから、大事な場所も今は牧場になって牛が踏みつけているかもしれないけれども、許して下さいと言いながら割箸でお酒をまいて帰って来る。

夢を見た時には、気になったので、榛のおばさん(孝太郎さんの養女のミヨさん)に電話して聞こうと思ったが、出先で偶然にミヨさんに行き会った。するとおばさんは、足がひっぱられるような気がしてここに来てしまったが、おまえが私に用事があったのかと言った。それで夢の話をする、おまえが今までしてきたようにして、その場所を清めてくれと言われたので、そうすることにしている。

[島マチエ氏]

### 6-5-7. 死生観

昔は夜歩くときはほっかぶりして歩けと言われた。そうしないとヨダカに髪の毛を抜かれて、その場で死んでしまうと言われた。

[島マチエ氏]

大野ハナさんというおばあさん(榛孝太郎は彼女の舅さんにあたる)と同じ病院に入院していた。私はリューマチで体がきかなくなり、子供に乳も吸わすことができないくらい悪かった。

すると、大野さんのおばあちゃんは、自分も若い時、同じ病気にかかって辛かったが、近いうちにお葬式が出るから、その家の玄関で、私の病気を背負って行って下さいと頼めよと私に言った。それから三日目でそのおばあちゃんは亡くなった。だから、自分が死ぬのがわかっていて私にそう言ったのかなと思った。それで、作ったおはぎを持って行って供えて線香を上げると体が軽くなってすっかりよくなってしまった。私の病気を背負ってくれたのだなと思った。

[島マチエ氏]

## 6-6. 人間の動作・仕草

### 6-6-1. 訪問

榛孝太郎のところに屈斜路から歳をとった女の客が来た。その人は、家の外で自分の着てきたものを脱いで袋にしまい、着替えをした。また、靴を脱いでぞうりのようなものに履き替え、黙って頭を下げた入って行った。迎える方も訪れる方も、イツソレレと言いながら手を握りあっていた。

[鎌田タツ氏]

客が家に入るときは、足踏みをして、家の中の人に来訪を気づかせた。

[伊藤隆雄氏]

私が12、3歳の頃、父親が山子に働きに行くので、八重清太郎さんの家へ行った。私も夜具を背負って行った。家の前まで来ても父親は入ろうとしなかった。すぐには入らなかった。そのうち、家の中の人気が付いて入れと言ってくれた。父親はまるきり和人だったが、昔のしきたりを知っていたのでいきなり入らなかったのだろう。

[島マチエ氏]

昔は初めて来たお客にはタバコをすすめるものだとされていた。

[島 直氏]

## 6-8. 交易・通婚・戦争

### 6-8-4. コタンとコタンの関係

塘路に養父島太郎の伯父の土地があった。

[島 直氏]

私の実母である杉谷トクには、虹別に従姉妹がいた。

[島 直氏]

虹別には、塘路の人はごく限られた人しか来なかったが、屈斜路の人はしょっちゅう来ていた。

[伊藤隆雄氏]

塘路や屈斜路の人がクマ捕りに虹別に来て住み着いたのではなかろうか。厚岸、根室とは、往来がなかった。屈斜路の女性が虹別にやってきて、親戚の子にお菓子をやった。おばさんが

帰ったあと、子供はお菓子がほしくて、一人屈斜路に行こうとして道に迷ったことがある。ウバユリのたくさん生えているところで見つかったそうだ。

[島 直氏]

塘路と交流のあったのは屈斜路のアイヌの人達だ。屈斜路の弟子キンという人は、島太郎の妻だった。だから塘路と屈斜路とは付き合いが昔からあったのではないか。あと、塘路の人々は、舌辛（シタカラ）の人々とも交流があったらしい。

[島 直氏]

虹別に明治時代にふ化場ができた時、塘路の人々がだいぶ働きに移り住んで来たようだ。

[島 直氏]

釧網線は昭和二年に開通した。それまでは塘路と釧路は舟で行き来していた。だから日帰りではできなかった。汽車が開通してから日帰りできるようになった。冬は凍った釧路川の上を馬そりで行き来していた。

[島 直氏]

阿寒と塘路はあまり行き来がなかったらしい。厚岸、根室ともあまり交流がなかったようだ。

[島 直氏]

十勝の本別と塘路とは親戚もいて、交流は相当にあったようだ。

[島 直氏]

塘路から虹別に遊びに来た時、おみやげにハマナスの実をもらったことがある。してみると、どこかの浜と虹別とは何か交流があったのではないか。

[島 直氏]

中標津にアイヌの人が昔たくさんいたとは聞いていない。

[島 直氏]